

NEWS LETTER

Vol.09



東北大学ナノテク融合技術支援センター ニュースレター
February, 2017
CENTER FOR INTEGRATED NANOTECHNOLOGY SUPPORT



TOHOKU
UNIVERSITY



センター長挨拶

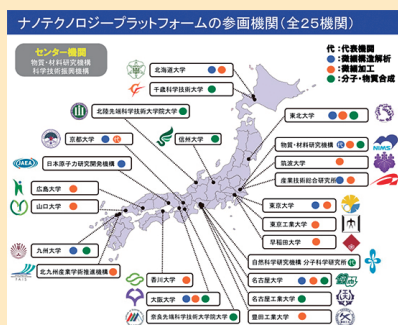
吹き下ろす風の冷たさが身にしみる季節となってまいりましたが、皆様、いかがお過ごしでしょうか？
この季節の移り変わりは太陽を回る地球の地軸が公転面から約23度傾いていることに起因します。

一方、地球表面が動植物に適した温度に保たれているのは地表の7割を占める海と、バールのように地球を覆う大気があるからです。その海が誕生したのは40億年前、そして植物の存在により酸素が増えオゾン層ができ、5億年前には地上に生物が暮らせるようになりました。しかしWHO（世界気象機関）の報告では2015年の二酸化炭素濃度は観測史上初めて400ppmを越え、並行して世界の人口も70億人を越えています。人類の歴史を振り返ると、人口増加は科学の進歩と社会の在り方に密接に関連した現象であることがわかります。たとえば中世ヨーロッパでは鉄製有輪すきの普及により農業生産は飛躍的に上昇し、増えた人口の受け皿としての都市の発展を促しました。また産業革命は、科学技術の進歩に加え、都会に流れた豊富な労働力がマッチすることで急速な展開を見せました。そして工業の発展がさらなる科学の進歩を促し、石油と電力の登場により20世紀には科学技術は万能であるとの神話まで生まれたのです。

果たしてこの発展はいつまでも続くのでしょうか。国連の予想では2050年には地球上に90億もの人々が生活を営むとされています。もし、科学が人類のためのものであるならば、私たちはその力によって地球と共存する道を見つけなくてはなりません。

白銀の樹氷に包まれた木々は、今、我々にどのようなメッセージを投げかけているのでしょうか。日本はその国土の66%を森林に覆われており、世界でもフィンランドと並ぶ有数の森林保有国です。その狭い国土で暮らす我々日本人はもともと自然と共存共栄するすべを知っているはず。今、私どもの活動が人類そして地球に優しい科学技術を構築していく一助となればこれにまさる喜びはありません。（今野豊彦）

文部科学省 ナノテクノロジー プラットフォーム 事業



最先端の研究設備を有する全国の大学、研究機関が一体となって設備の共用体制を構築することにより、ナノテクノロジー研究の更なる発展に寄与することを目的として平成24年からスタートした文部科学省のプロジェクトです。

センター機関の物質・材料研究機構と科学技術振興機構を核として、全国25機関が「微細構造解析」、「微細加工」、「分子・物質合成」という三つのプラットフォームを構成することにより、先端的、効率的な支援を分野横断体制で行っています。

ナノテクノロジープラットフォームHP
<http://nanonet.mext.go.jp/>